

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520750

研究課題名(和文) 小学校外国語教育における日本のEFLとオーストラリアのJFLの比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Elementary School Foreign Language Education in Japan and Australia

研究代表者

LINGLEY DARREN (Lingley, Darren)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：50335915

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：報告者は、3年間に渡り、日豪小学校における外国語教育の比較研究を実施した。この鏡像的文脈における研究は、主として、小学校における外国語(FL)教育に対する教員の態度に関するものであり、はっきりと述べられたカリキュラムの目的を批判的に比較すること、人的資源に関する事柄を評価すること、二つの類似した国際的FL状況において外国語教育に使用される教授法と教材を評価することを通して行なわれた。本研究は、相互交換訪問を通して、参加した小学校語学教員に対する貴重な異文化における現職教員訓練のための機会を提供した。

研究成果の概要(英文)：I did a three-year comparative study of primary school foreign language education in Japan and Australia. This mirror-context study was mainly concerned with examining teacher attitudes about primary school FL education, critically comparing stated curriculum objectives, assessing human resources issues, and evaluating teaching methodologies and course materials used for foreign language education in two comparable international FL settings. The project provided valuable intercultural in-service teacher training opportunities for several participating primary school language teachers through reciprocal exchange visits. The overarching aim was to gain a holistic understanding of FL education at the primary school level through close examination of both the unique and shared contextual factors in each setting.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：EFL primary education

1. 研究開始当初の背景

全国的な「特区」計画の決定と、最初に外国語活動の導入を通して小学校のカリキュラムに英語を導入し、続いて英語を正規の科目として確立するという最近の構想を考慮すると、日本の公立小学校におけるEFL教育に関するより多くの研究が必要とされる。このようなカリキュラムに関する計画は、研究者に対して、小学校レベルにおける言語教育の研究に対する、豊かではあるがまだ未開発なデータ資源を提供している。日本の小学校レベルにおける外国語としての英語(EFL)教育に関する研究は限定的ではあるが、まだ揺籃期にある研究基盤に貢献することを目指した。カリキュラム、言語計画の立案、教授法を結びつけた比較研究は、韓国、中国、台湾、日本などのアジア的文脈の中で、いかに小学校英語が採用され教えられているかという側面に関しては発表されているが、どのふたつの特定の状況に関する鏡像文脈におけるFL教育に関する比較研究も公表されてはいない。

本研究実施のもう一つの理由は、国の教育体系への英語の正式導入と格闘している小学校教員を支援する方法を発見するためであった。参加者の語学担当教員が、それを通じて自分とは正反対の状況で使用される教授法と教材を調査するために、もう一つの言語教育の文脈を訪れることができる、国際的な専門能力開発(PD)の機会を創造することにより、本研究は在職中の訓練の必要性という問題に取り組んだ。指針付きの教室の調査、在職中の訓練と教授法の訓練、ワークショップ、授業の実演、教材開発援助などの面に関しては、高知地区の教員にとってはほとんど得られるものはないままである。

地域のFL状況を比較可能な国際的FL状況と比べるために、タスマニア(豪州)が選ばれた。規模および日豪における両都市の周辺的位置という点と、正反対のFL教育状況の実例であるという点から、高知とタスマニアは、比較可能であると判断された。また、両文脈における小学校での言語学習は、非正規科目の扱いである。

2. 研究の目的

日豪両国の状況下における外国語教育(EFL、JFL)の諸相を比較した公表された研究はない。それ故、本研究は、方針、教員の態度、FL教授法、カリキュラム計画、評価などのさまざまな相互に結びついた、カリキ

ュラム特性に関する洞察力に富む調査資料の収集を目指した。カリキュラムとFL教育方針研究の視点から見れば、このような相互に結びついた特性はどれも個別に研究することはできない。小学校運営レベルにおけるFL教育の全体的理解を得るためには、方針で述べられている事柄、FLカリキュラム関連文書の調査と比較、FL担当小学校教員への両文脈に基づく面接、両文脈における授業参観、フィールド調査のための教員相互交流訪問が必要であった。

両文脈における外国語教育カリキュラムは、急速かつ継続的変更を被っているため、このような変化が、教育条件、教授法、教育実践教員の考え方に、いかに影響を及ぼすかを継続的に観察し、研究プロジェクトを、言語教育の最善の実践に貢献するよう位置づけることが重要である。地域的な教育文脈上の要素は重要であるが、教授法の共有、他の比較すべき地域カリキュラム計画から見た調査と、このような計画の世界的規準に基づく評価と比較とを通して、学ぶべき点も多い。研究目標は、異なる外国語が、二つの比較すべき正反対、または鏡像的、FL文脈(日本における外国語としての英語と、豪州における外国語としての日本語)において、いかに教えられているのかを考察することにより、参加教員に自身の技能についてより多く学んでもらうことにあった。

独自性と重要性の観点から見た場合、本プロジェクトの本質的特徴は、ホスト教員として、または各FL文脈出身のプロジェクト参加者として、国際的フィールド調査を通じて、貢献してくれる、数名の小学校授業担当者と、研究と実践との生き生きとした結びつきの確立を目指した点にある。研究者の協力と指導を得て、教員によって実施された相互的方法と教材交換は、言語教育研究と日常的に教室で実際に教えられることとのギャップの橋渡しの手助けとなる。本質的な点で、授業担当教員がより深く研究に関わることは、研究上の発見が、ボトムアップ的過程を通して、草の根レベルで、共有され言語教育に応用される可能性を増大させることになる。もうひとつの目的は、協力校間の草の根国際交流を確立する事であった。

3. 研究の方法

資料は、主として、両文脈の小学校教員参加者による毎年の相互フィールド調査訪問より得た。これらの訪問においては、豪州のJFL小学校教員参加者がEFL教育参観のために来日し、JFLクラス参観のために英語教育担当の日本人小学校教員が豪州に

派遣された。プロジェクトの3年間で、各国から3名ずつ、計6名の教員が、ほぼ1週間の相互交流訪問に参加した。正反対のFL状況におけるフィールドワーク中に、教員は、週3校を訪問し、異なる学年の、母語話者補助員付きチームティーチング授業や、日本人または豪州人授業担当教員による単独教員授業のような、異なる教育状況における授業を1日4クラス参観することを求められた。6名のJFL/EFL教員は、滞在中にフィールドノートを取ることで、参観の振り返り日誌をつけることを求められた。フィールドノートと、振り返り日誌の項目は概念上ふたつに分けることができた。すなわち、フィールドノートは授業中実際に起きたことに関するクラス内観察を記録しており、振り返り日誌は、正反対の状況下で言語を教える者の観点からの、小学校におけるFL教育に対する全体的印象により関係するものであった。学校訪問に続いて、フィールドノートと振り返り日誌の項目と部分は、さらなる意味の明確化を必要とするものと、追跡面接時により深い議論をすべき興味深い話題とに分類された。各教員はその後、振り返り日誌の分類された内容に基づき、一部構造化された形式に従って面接を受けた。全ての面接（各々ほぼ60分）は記録され文字化された。

加えて、資料は、外国語としての日本語（JFL）担当豪州人教員と外国語としての英語（EFL）担当日本人教員間の、小学校レベルにおけるFL教育の諸相に関する態度相違を計測するための、独自のアンケート手法を用いて収集された。そのアンケートは、早期言語学習全般に関する態度、幼少学習者評価に対する態度、制度上の制約に対する寛容度に関する態度、小学校における目標外国語使用に対する態度を含む、さまざまに構成された項目のもとでの教員の態度を計測する、47の質問項目から構成された。

教員面接、授業参観、教材と教授法の交換、両文脈のカリキュラムとシラバスに関する文書の比較から得られる補助的資料も利用された。

4. 研究成果

プロジェクトの初年度では、高知とタスマニア（豪州）の小学校間の異文化間学校交流計画に関する発見が示された。異文化能力の開発を言語教育の際立った特徴と見なす両文脈のそれぞれから得られた、公式のカリキュラム関連文書に関して、比較可能な類似点が引き出された。しかしながら、言語教育実践教員が効果的な異文化言語活動と交流を児童に提供することは困難である。三種類の異

なる言語文化交流計画が述べられた。結果は、有意義な草の根交流を通して、いかに異文化意識、理解、能力が促進されるかを示すものであった。小学校レベルの国際的學校交流計画を運営する際に直面する難問が論じられた。

本研究2年目においては、研究代表者は豪州の国際会議で本研究初年度の研究成果を発表した。日豪協力校間の相互教師訪問から得た最初の調査研究結果を概説し、協力小学校間の交換計画実施における成功、失敗、難問について論じた。草の根の相互訪問が、言語教育のカリキュラムをどのような形で増強することができるかに関して主に議論が行われた。初年度収集の面接データに関しては、全国語学教育学会（JALT）2012年次国際大会（静岡県浜松市）で発表した。データに基づき比較を行い、主に日豪両国の鏡像的外国語教育状況に由来する教員の信念を検討することで得られる知見に関して研究成果が議論された。面接データの結果から、日豪両国それぞれのカリキュラム目標に関して、きちんとした学習評価がどのようにして達成されるのかという点で、教師は広範囲に及ぶ評価概念を有していることが明らかになった。資料は、日豪の語学担当小学校教員の間には、教員としての自信に注目すべき相違があることを示している。

日本とマニラにおいて、本計画第1、2年次で得られた発見に基づく発表を行った。最初の発表では協力教員の相互訪問での発見の概略を述べ、成果は国際的な人材育成の機会と現職中の訓練がいかに教育実践を高めるかの観点から述べられた。2回目の発表では、日本の学校を訪問した3名の豪州教員と、豪州の学校を訪問した3名の日本人教員による日誌、ノート、および追跡面接を調査した。参加教員は、鏡像的文脈での観察が言語教育の考え方に与える肯定的影響を認めたが、一方ではうまくいく方法が、他方では実施困難なことへの不満も漏らした。データ比較に基づき、鏡像的なFL文脈の調査から何を得られるかという視点から比較を行い、成果は、フィールド研究訪問完了時の、教員の信念と実践における経験後の変化の観点から、主に検討された。

3名の豪州人JFL教員の日誌の内容に基づき論文を1編公表した。批評的な観察と、日本の小学校でのEFL教育に対する内省的フィードバックの観点から概略を述べ、鏡像的文脈における言語教育に対する内省を通じた教員の学びと新たな自己の位置付けに焦点をあてた。

要約すると、本研究と教員交流計画に基づく発見は、小学校におけるFL担当教員が両文脈において、いかに急速に変化する政府の政策に対応しているかを理解するという点でとりわけ価値があることが分かった。さらに言えば、上述の資料から得られた計測可能な結果以上に、教材、教授法、文化おける交流を通じての参加教員と参加校の経験的利益は当初予想された以上に貴重である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 件)

Darren Lingley, Australian JFL Teacher Reflections on Foreign Language Activities in Japanese Primary Schools, 国際社会文化研究、第14号、pp. 57-95
2013年 12月

[学会発表](計 件)

Darren Lingley, A Post-Experiential Study of Primary School JFL/EFL Reciprocal Visits, Asia TEFL, 2013.10.28, Manila, Philippines

Darren Lingley, Intercultural Grassroots Exchange: International Reciprocal PD Visits for Primary School Language Teachers, SIETAR Japan, 2013. 9. 21, Tokyo

Darren Lingley, Primary School Foreign Language Education: A Mirror Context Comparative Study of JFL/EFL, Australian Council of TESOL Associations (ACTA) 2012.7.5, Cairns, Australia

Darren Lingley and Sean Burgoine, A Comparison of Primary JFL/EFL Teacher Attitudes, 小学校におけるJFL/EFL教師の意識の比較, Japan Association of Language Teachers, 2012. 10. 14, Hamamatsu

Darren Lingley and Marcus Otlowski, Primary School Intercultural Exchange Projects, Japan Association

of Language Teachers, 2011. 11. 20,
Tokyo

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ダレン リングリー (Darren Lingley)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授
研究者番号：50335915

(2) 研究分担者

マーカス オトロスキ (Marcus Otlowski)
高知大学・教育研究部人文社会科学系・講師
研究者番号：90448390